

マックス・ラインハルト 「『真夏の夜の夢』 1905 年上演の演出の手引きから」¹⁾

Max Reinhardt, «Aus dem Regiebuch “Ein Sommernachtstraum”» (1905)

衣装

(…)

妖精たち：さまざまな微妙な色あいの、軽くて繊細なヴェール。藤色、菫色、薄い色と濃い色、緑から深緑のさまざまなグラデーション、同様にごく薄い水色から紺色までのグラデーション。さらに虹色のヴェール、七色のほかにグレー、白、金色、銀色に輝く。

(…)

第 2 幕、第 1 場、アテネ近郊の森

幕が開くと、情景はまだ雲の帳に包まれている。この銀の帳越しに月が鈍く光っている。月はだんだん光を増す。雲の帳はしだいに晴れ、いく筋かの霧となる。泉のせせらぎ。

舞台の情景は丈の高い草むらと木のたくさん生えた森にある空き地を示す。後方には森に覆われた高い丘が見える。丘は舞台奥で終わっている。下手には木立の間から湖が光っているのが見える。上手は丘陵。湖の脇を歩いて上手に向けてそれほど広くはない道が舞台奥へと続いている。

森の木々は非常に高い。樹冠は高いところにあるので、妖精たちはとても小さく見える。木の幹はできるだけ太くなければならない。覆いは高く吊り上げられている。

月の光が木の葉群越しに草むらをまだらに照らしている。湖には後方から照明が当てられている。

芝居が始まる。音楽。霧の筋はしだいに晴れていく。妖精バックが丈高い草に横になって空を見ている。舞台上手に横たわり、頭を少しだけ上げている。舞台の高方で、女の妖精が（宙乗りで）もやもやした銀色の霧の中をゆっくりと下手奥から上手前へと移動する。バックの頭上にくると、バックはその妖精に話しかける。妖精はしばらくの間バックの頭上に漂い、下にいるバックの方を向く。

この妖精のシーンでは小声で、しかしはっきりと話すこと。伴奏の音楽とできるだけ調和していなければならない。話し声は、かすかな歌声のように聞こえなければならない。

まずオベロンが伝説上の獣（大きな角を持つ白い鹿）に乗って現れる。オベロンは頭に輝く冠をかぶっている。初めは一人きりで、用心深く、後方（舞台奥）の森から現れ、湖のほとりの道を通って舞台前方にある空き地の入り口にやってくる。

オベロンの後からバックと同じような身なりをした大柄な妖精たちがやってくる（5人）。さらに、神話や昔話のさまざまな小人の姿をした小柄な妖精たち。8人の妖精がバックの後をちょこちょこ歩き、10人の妖精が草むらや上手の丘の上から飛び出してきて、バックの前、舞台前方まで転がり出る。

バックはすぐに後方へ走って行き、オベロンにタイターニアがやってくる事を告げる。そしてオベロンと並んで舞台前方へ進む。

あたりはにぎやかになる。すべてが動きまわる。だれもがちょこちょこ歩いたり、転げまわったり、飛び跳ねたり、走ったり、踊ったりする。やや後になってから、タイターニアが湖の上を漂い、その周りで羽根の生えた小柄な妖精が踊る。他の小柄な妖精たちは飛び跳ね、タイターニアの前をちょこちょこ歩く。芥子の精、豆の精、蜘蛛の巣の精が先、タイターニアの後には抱き合う6人の大柄な妖精たち。

タイターニアは下手の木立の間から現れる。オベロンが空き地に立っているのを見ると、驚いてすぐに後ずさりする。

会話が始まる一方で、小柄な妖精たちは木立の中で遊び続ける。大柄な妖精たちは会話に耳を傾け、話に加わる。

大柄な妖精も小柄な妖精もみな囁き、口笛を吹く。オベロンの妖精たちはオベロンの前で飛び跳ねる。タイ

1) [訳註] 『真夏の夜の夢』 1905 年公演のときの第 2 幕第 1 場の演出指示。翻訳に際しては、以下を底本とした。Max Reinhardt, *Leben für das Theater, Briefe, Reden, Aufsätze, Interviews, Gespräche, Auszüge aus Regiebüchern, Herausgegeben von Hugo Fetting*. Berlin, Argon Verlag, 1989, pp. 375-378. なお、このときの公演の写真、およびホフマンスタールが「ラインハルトの仕事」の中で触れているいくつかの公演の写真はインターネット上で見ることができる：<http://www.glopad.org/pi/ja/record/person/603>

ターニアの妖精たちは野原で踊り、草むらの中で飛び跳ねる。妖精たちは鉢合わせになると、花を投げつけ合う。いろいろな花が飛び交い、妖精たちは二股の木の枝で相手を威嚇し、草むらで取っ組み合いをする。

タイターニアは（宙乗りで）もと来た道を引き返す。彼女の後ろ、また彼女を囲んでまず大柄な妖精たちが、ついで小柄な妖精たちが退場。

オベロンはその場に暗い顔つきで静かに立っている。お付の妖精たちがおずおずとその傍らに寄り添う。囁き合い、オベロンの様子を伺ってから、彼らは忍び足でそっと下がっていく。オベロンの怒りが爆発するのを恐れているような様子。妖精たちは囁き合いながら、舞台の奥へと消えていく。

（訳：坂巻隆裕）